

Kasagi Katsuichi's "Sumo Novel" and Literary award

IZUMI Tsukasa

Abstract

This paper summarizes the relationship between the sumo novel by Kasagi Katsuichi and the literary awards of "Sunday Mainichi." Kasagi Katsuichi, originally a sumo wrestler, gained popularity as an intellectual wrestler who graduated from university. He published many articles in magazines.

Kasagi Katsuichi, after the war, submitted a romantic novel to a literary award. This was an action taken to explore the possibility of living outside the unstable sumo world. The literary award also functioned as a means to ascertain future possibilities.

笠置勝一の相撲小説と文学賞

—『サンデー毎日』大衆文芸入選作「愛の渡し込み」論—

和 泉 司

1 『サンデー毎日』大衆文芸』と笠置山勝一→笠置勝一

1922年に創刊された当初から「読物」「講談」と呼ばれていた大衆文学テキストをメインコンテンツとしていた週刊誌『サンデー毎日』は、1926年3月7日号で公募型文学賞である『サンデー毎日』大衆文芸』を開始した。この文学賞は第二次世界大戦中の中断（1944～45年）を挟んで戦後の1959年まで、55回の募集と発表を行った。¹この文学賞は初期から終盤に至るまでの数多くの応募者・入選者から、非常に多くの著名作家を輩出した。それは大衆文学作家にとどまらず、純文学作家、芥川賞作家も文壇に登場するまでに応募・入選をしている。²一方で、『サンデー毎日』大衆文芸』は同じ投稿者が複数回の入選を繰り返していることとそれを雑誌が許容している状況から、受賞が商業作家デビューに即つながらる文学賞とは認識されていなかったことがうかがえ、作家志望者たちの「習作発表の場」という意味合いが強かったことが推測される。³

この傾向は戦後1946年に『サンデー毎日』大衆文芸』が再開されてからも変わらなかった。1946年の第34回から1959年の第55回までの間で、入選作家・佳作作家の多くが入選・佳作を繰り返していた。⁴1949年以降、やはり戦時中に中断していた芥川賞・直木賞が再開し、また他の出版社からも次々と文学賞が創設される中、当時としては最も長期間継続している文学賞であった『サンデー毎日』大衆文芸』は文学賞としての権威を高めていくことはなく、従来からの立ち位置をほとんど変えていなかったことになる。

この戦後『サンデー毎日』大衆文芸』に応募し、入選した作家の1人に、笠置勝一という人物がいる。このペンネームでの文筆活動はごくわずかしかなくこの人物はしかし、この当時すでに文壇でもよく知られていた。そしてそれ以上にスポーツ界で著名な人物であった。笠置勝一は「笠置山」という四股名で活躍し、「インテリ力士」として総合雑誌・文芸誌にも度々寄稿して有名だった、笠置山勝一（1911～1971）だったからである。

「インテリ力士」としての笠置山勝一については、赤澤史朗「戦時下の相撲界—笠置山とその

時代一」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第75号、2000年11月)、新田一郎『相撲 その歴史と技法』(公益財団法人日本武道館 2016年)、胎中千鶴『叱られ、愛され、大相撲! 「国技」と「興行」の100年史』(講談社選書メチエ 2019年)がそれぞれ詳述している。それらによれば、笠置山勝一は本名を仲村勘治といい、奈良県に生まれた。運動能力と成績の両面に優れていて、旧制の県立郡山中学校在学時に力士を志し、1928年に東京の早稲田中学校に転校、所属した出羽の海部屋に住み、そこから通学。1929年には第一早稲田高等学院に入学した。⁵しかし大学学部まで進学すると卒業時の年齢が高くなり力士としての出発が遅れることを考慮して1930年に早稲田大学専門部政治経済学部へ転学し、力士生活を始めていた。⁶1932年2月に早稲田大学専門部2年に在学のまま幕下付け出しで初土俵を踏み、このときに笠置山を名乗った。⁷以降、学生相撲出身者として注目を集め、また早稲田大学関係者やOBたちからの強い支援を受けながら力士として活動し、最高位は関脇、そして戦後最初の本場所であった1945年11月場所で現役を引退し、年寄・秀ノ山を襲名した。以降、戦後の文筆活動では、「秀ノ山勝一」の筆名を用いている。

戦前においては非常に珍しかった大卒力士の笠置山勝一は、入幕後から文筆・言論活動の依頼を多く受けるようになった。雑誌への寄稿や対談、座談会は相撲協会の機関誌『相撲』、スポーツ誌の『野球界』『アサヒ・スポーツ』の他に、『改造』『中央公論』といった当時最も権威を持っていた総合雑誌にも寄稿している。⁸胎中によれば、早稲田の同窓である津田恒雄が編集長だった1937年以降の『野球界』には笠置山が頻繁に登場しているという。⁹中でも笠置山の戦前の原稿で有名なのは、『改造』1938年6月号に掲載された「横綱双葉山論」であろう。当時54連勝という無敵の強さを誇っていた横綱・双葉山の強さを分析し、その攻略法を論じた「論文」を笠置山は発表した。¹⁰『改造』という当時の日本語圏においてもっとも権威を持っていた総合雑誌に、論客・知識人・大学教員・政治家にならんで「論文」を寄せた「力士」のインパクトは非常に大きかったはずだ。

このように「インテリ力士」というイメージが定着した笠置山は、そのイメージに従いつつ、相撲と言論との両面に必死に活動を続けていた。そしてこの時期から、小説の発表もしていた。笠置山勝一の小説については、谷口基「笠置山勝一と『新青年』～あなたはもう笠置山勝一の叫びを聞いたか～」(『新青年趣味』第40号、1991年12月)がほぼ唯一の研究論文である。谷口は雑誌『新青年』における笠置山勝一の寄稿文に注目し、以下のように述べている。

笠置山勝一という人物の存在意義は、その〈相撲「道」に捧げる愛〉というテーマによって、語り尽くすことができるという事実があるからだ。しかし、その事実を端的に世に伝え得たものは果たして何であったのか。

それは「笠置山勝一」という力士名で『新青年』誌上に残された創作、評論、随筆の数々であると我々は信じている。

(略) 土俵の上における彼自身の戦いに加え、筆をもつての評論・創作活動を敢えてしたときにこそ、「理論派力士」、否、啓蒙家としての笠置山勝一の風貌が世に知らしめられたのだ。

その活動の場として、『新青年』が大きく貢献していたことは繰り返すまでもないだろう。

谷口のまとめによると、笠置山勝一が『新青年』に寄稿した小説は以下の5作となる。

「相撲小説 櫓太鼓」	(1940年2月)
「相撲小説 師弟」	(1940年6月)
「相撲小説 甚句無用」	(1941年5月)
「相撲小説 四股」	(1942年5月)
「相撲小説 花道」	(1942年6月)

この他、座談会、評論、随筆が計6回掲載されており、『新青年』には1940年から43年までの4年間に11回登場していることになる。¹¹ 谷口は、『新青年』において「相撲小説」を呼ばれたのは笠置山勝一の小説だけであったとしている。そして、「相撲小説」を書いている作家は「舟橋聖一、鈴木彦次郎、尾崎士郎らがいた」が、「笠置山は、彼らの目と筆に捉えられる以上の相撲を書いた」人物であり、笠置山勝一の「相撲小説」は「力士しか書けない相撲小説として『新青年』創作欄に君臨していたと言っても、過言ではない」と高く評価している。¹²

このように戦前、そして戦時中に力士と作家の両方の活躍をみせていた笠置山勝一は、日本敗戦後最初の場所を持って現役力士としては引退した。そしてその後に発表した小説が、『サンデー毎日』1949年2月27日号で発表された「第37回大衆文芸」に入選した笠置勝一「愛の渡し込み」であった。

このとき、関取「笠置山」から年寄「秀ノ山」になっていた笠置山勝一は、「笠置勝一」という微妙に異なる筆名を用いていた。「笠置山勝一」でもなく「秀ノ山勝一」でもない「笠置勝一」という名で、『サンデー毎日』大衆文芸に応募した意味と、「愛の渡し込み」という小説の意義、そして『サンデー毎日』という雑誌が果たしていた役割とについて、ここから考えてみたい。

2 笠置勝一「愛の渡し込み」の目指すところ

第37回の『サンデー毎日』大衆文芸は、1948年12月末で締め切られている。¹³ 写真1にあるように、応募総数は1286編におよび、そこから入選作四編と選外佳作六編は発表されていた。笠置勝一「愛の渡し込み」はその入選作四編の一つであり、1949年3月発売の『サンデー毎日別冊 春の大衆文芸』に全文掲載されている。非常に多くの投稿作の中の入選四作に選ばれているところからみても、笠置勝一の作家としての才能が見て取れると言えよう。

ただし、写真3の「作者の言葉」にあるように、笠置勝一は自らがかつての「笠置山勝一」であることは全く隠していない。すでに多くの商業誌で発表経験があり、戦前に複数の著書も出版している著名な元力士にして相撲協会の現・年寄である笠置勝一という人物が小説を応募してきたとき、『サンデー毎日』側がそのような作者の背景を全く考慮せずにテキストを評価したかは

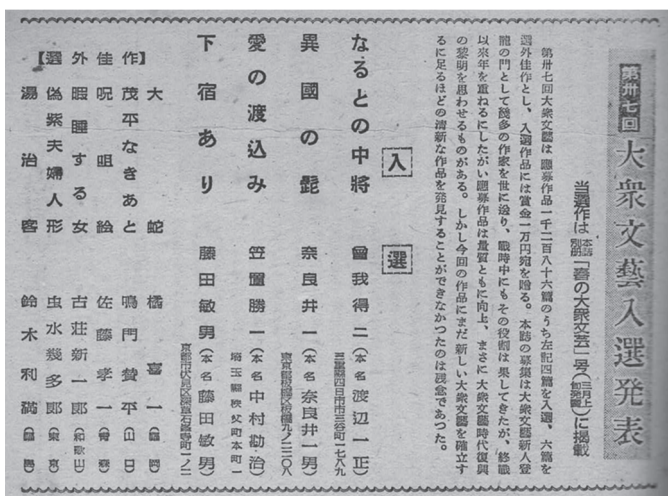


写真1 『サンデー毎日』1949年2月27日号掲載の「第卅七回大衆文芸入選発表」

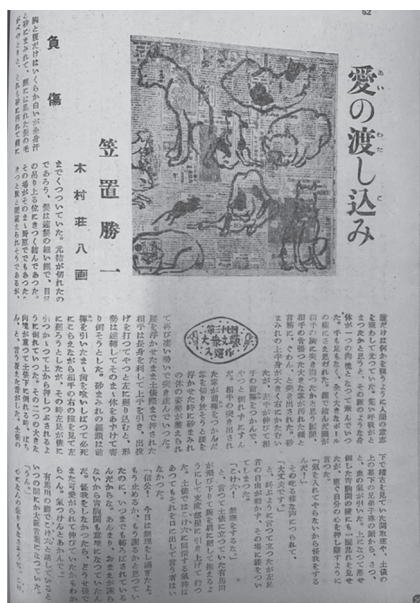


写真2 『サンデー毎日別冊 春の大衆文芸』（1949年3月）掲載の「愛の渡し込み」

わからない。その点は留保して考えるべきであろう。笠置勝一自身も「作者の言葉」の中で「学生時代から文筆的なことが好きでサンデー毎日の大衆文芸にも応募したことがあり、新青年には昭和十五年「櫓太鼓」を発表したのをはじめ、天龍の脱退騒ぎをかいた「子弟」常磐山をかいた「甚句無用」「花道」等を発表し、最近では匿名で「ストーリー」に「花道」をかいた。」というように、自分の執筆歴をむしろ誇示していて、新人として応募してきたという意識は感じ取れない。

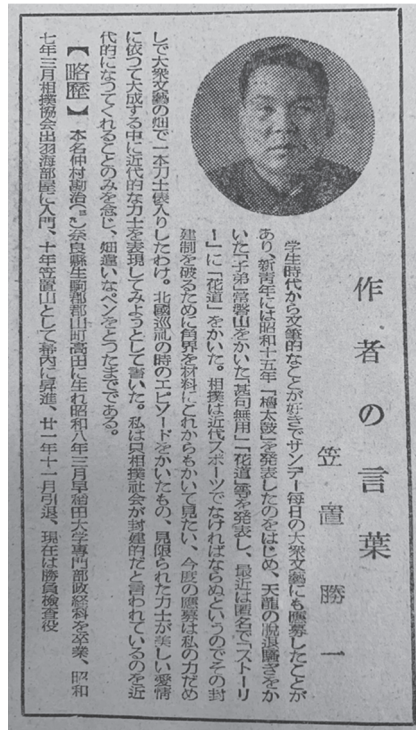


写真3 『サンデー毎日別冊 春の大衆文芸』(1949年3月)
掲載の笠置勝一「作者のことば」と近影

笠置勝一は続けて「相撲は近代スポーツでなければならぬというのでその封建制を破るために角界を材料にこれからもかいて見たい、今度の応募は私の力だめしで大衆文芸の畑で一本刀土入りしたわけ。」と述べ、相撲の近代スポーツ化の運動の一環として、そして自分自身の「力だめし」として投稿したことを表明していた。この点も踏まえて、「愛の渡し込み」の内容に触れてみたい。

「愛の渡し込み」のあらすじは以下の通りである。

相撲部屋に入門して8年を過ぎた関西出身の幕内力士・藤井信一は、早くに両親を亡くし、叔父の家庭で育てられた。16歳になるとき、叔父に頼み込んで上京し相撲部屋に入門した。しかし、所属した部屋は弟子の多い大部屋で、縁故のない彼に親切に指導してくれる師匠や兄弟子はいなかった。稽古中によく転がされる彼を、いつの間にか部屋の誰もが「こけ六」と呼ぶようになった。信一は心根が穏やかであったため、弟弟子たちからこけ六と呼ばれても怒りもしなかった。

信一たちは北陸地方のある漁師町に巡業に来ていたが、そこでの稽古で信一は足を痛めて歩けなくなってしまったため、部屋の力士一行は先に町を去ってしまい、信一は1人旅館に残って療養することになった。そこで信一は日々絵を描いて過ごしていたが、その絵が非常に上手だった

ため、女中のおしげと仲良くなる。そしてそのおしげが、旅館の隣の家に住む三枝という娘に信一の絵を見せた。それをきっかけに、信一は三枝に絵を見せるようになった。信一は美しい三枝に惹かれるが、一緒に浜辺へ散歩に出かけたとき、力士としての上昇意識に欠ける信一に対して三枝が「こけ六」と呼ばれて悔しくないのか、やればきっと幕内に入れるのに、と強く発破をかける。それをきっかけに、信一は意識を変え、いつか三枝を迎えに来ることを心に期して、東京へ帰る。

太平洋戦争の情勢が悪化していく中、部屋の力士達が応召され始めると、師匠や兄弟子達が信一に目をかけるようになる。元々体格に恵まれ能力もあった信一は頭角を現すようになり、応召もされずにすんだため、戦時中も信一は相撲に一心に打ち込み、十両に昇進、「藤の花」という四股名を得た。戦後最初の場所（1945年11月場所）で幕内に入り、その1年後に関脇となった。大関候補の関脇藤の花となった信一は、5年ぶりに北陸地方へ巡業に出かけ、三枝との再会を期待した。しかし著名力士となった信一から三枝に送られた手紙は、三枝の父親が隠しており届いていなかった。三枝も信一が幕内に入った時に手紙を送っていたが、相撲協会宛だったため信一には届いていなかった。

信一は北陸の旅館でおしげと再会し、三枝の近況を聞くと、今でも信一の昇進を祈願し、信一と会える日を待っていると聞いた。それを知った信一は三枝の家を訪ね、三枝のおかげで一人前になれたと礼を述べ、これからは二人で生きていく、どんな障害があっても、得意の「渡し込み」で突破していこうと決意するのだった。

「大衆文芸」の文学賞への応募作だけあって、「愛の渡し込み」の中心はこけ六＝藤の花＝藤井信一と三枝＝板東三枝子の恋愛物語となっている。谷口は、「愛の渡し込み」は「笠置山勝一」の「相撲小説」においては「冷遇されがち」だった「美少女への愛」が「相撲道への愛」と「同列に扱われるまでにな」って、「作者の成長が窺われる」テキストであると評価している。たしかに、戦前・戦時中に発表された小説と比べると、恋愛を重視し、最後にハッピーエンドを迎える展開は「笠置山勝一」の「相撲小説」からの大きな転換であり成長であることは間違いない。

ただ、そこには、戦時下に恋愛を主題とし、恋愛を謳歌する内容の小説を発表することが難しかったことも踏まえる必要がある。そして「笠置山勝一」という文化人・作家に課せられたイメージは「相撲の近代化」の発信であり、それを「笠置山勝一」自身が自覚して担っていたことの影響・制約があったことも考え合わせてもよいだろう。仮に「笠置山勝一」が恋愛主題の小説を書こうとしても、戦前の情勢はそれを許さなかったはずだし、「笠置山勝一」が作り上げてきた自らの「インテリ力士」像にもそぐわなかったであろう。

一方で、戦後はそれが「開放」されている。さらに、『サンデー毎日』大衆文芸」という文学賞の性格や、戦後当時の大衆文芸誌全般の傾向を考え合わせても、男女の機微や恋愛を積極的に描き込むことは、文学賞応募時の積極的・戦略的な選択になる。タイトルに「愛」という言葉が入っている点にも、それが明確に現れているといえる。「愛の渡し込み」の物語内容は、時代と

笠置勝一自身の作家としての技量の上達とが重なったところでできあがったのである。

故に、この物語では、恋愛につながっていく過程において、相撲および相撲部屋の課題が順を追って提示されていく。冒頭で、信一が足を負傷させたのは兄弟子の青駒関だが、あきらかに危険な状況になっていても青駒関は「気を入れてやらないからけがをするんだ！」と怪我を信一の責任であるかのように言って謝罪しなかった。そして、信一の技量が伸び悩んでいるのも、「誰の紹介もない彼に対しては師匠も兄弟子も冷たかった」からであった。信一の稽古環境は次のように語られている。

大部屋としての日常の習慣も難かしく、兄弟子にすら満足に使われなかった。稽古して貰うには関取衆も兄弟子も大勢だから申分ないが、其代り、誰と言って親切に教えてくれる者もいなかった。相撲は口で言って解るものでなく、身をもって体験すべきものと言う鉄則が、只、叱り飛ばし殴り飛ばして、尻から追うようにされて、胸にぶつかって行くのであった。初めて廻しを締めた時だけ、仕切り方、押し方を教えてくれたが、次の日からは口よりも手、手よりも棒切、汗かきの丈、箒、砂寄せの長い板だった。

(略)

そんな中において、藤井信一は大阪弁を笑われ、何を言ってもはいはいと言って怒らぬのをよいことに可愛がられたり、おもちゃにされていた。死んだ玉錦を雛形にしたような藤井は力士らしい身体であったが、力が弱く、初めから押すことばかり教えられた。時には投げたら勝てると思っても、叱られるのが恐ろしくて、押しでは突落されたり、捲落されたり、叩かれたりして転んでいた。綽名をつけるのが上手な稲の森関が或る時藤井に胸をかしていながら、こいつはこけ六だ、と、言って笑った。誰かがその意味を尋ねると、一度相撲をとったら六回も転ぶからさ、と、言って又飛び込んでくる藤井を転ばしながら、そうらね、こけ六だよ、と真面目な顔で言うのに、皆はどっと笑った。

このように、稽古と「いじめ」の区別がないままのような状況で、信一は手探りで稽古をしなければ鳴らない状況だったことが描かれている。相撲部屋の厳しい（そして時に理不尽な）上下関係がありつつ、信一のように縁故や寄る辺がなく、おとなしい性格の者は、「下」であるはずの弟弟子にも「こけ六さん」と呼ばれることすらある。これでは本来あった才能も生かせず伸ばせもしない。このような状況が相撲界の「封建的」な部分であり、それを近代化していくことが「笠置山勝一」そして笠置勝一の目的でもあったのだろう。物語の後半では、この「封建的」な状況が徐々に変わっていく様子が描かれる。

戦争が段々と不利になってくると、力士の中でも下の方から出征して行った。有馬川も次場所には十両に昇進と言う春に召集されて帰って来なかった関取衆の中でも二人、三人と戦地に行ったり、基地で相撲の指導をしている者が出て来て、こけ六の大部屋でも若い者が一年

の間に十名位いに減ってしまった。それまで気にならなかったこけ六を師匠も兄弟子も大事にし、頼りにするようになった。それは単に数の上からではなく、彼の土俵にすごみが出て来たのと、技に冴えが見えて来て、既に新十両として次場所に昇進出来る成績であったからでもある。土俵の動きがきびきびしてくると、日常の動作にもそれが感じられた。それまでぼんやりしているとされていたことが、関取らしい落着だと言われ、何をおいても威張らない優しさが部屋中の人気を集めるようになった。

信一の相撲部屋から「封建的」な理不尽がなくなっていったきっかけが戦争による力士の人数の減少であるというのは、危機的状況になって初めて、理不尽なルールに気づけるという残酷な現実を描いている。そして同時に、ただ環境や状況の危機的変化だけで改善はされないことも示されている。それ以上に重要なのは、力士個人の意識改革だからである。信一が成長したのは、師匠や兄弟子が丁寧な指導をするようになったからだけではなく、それ以上に、三枝との別れをきっかけに、自分を変えようとし、力士としての自覚を強く持ち直したからである。そういう意味での個人の精神論も、ここでは重視されている。漫然とした努力ではなく、目的意識を持つことの必要性がここで求められているのだ。

そして、戦前・戦時中の「笠置山勝一」の小説であったならば、その自覚を得るきっかけは稽古や相撲道の倫理に気づくことにあったのが、「愛の渡し込み」ではその役目を恋愛が果たすことになる。谷口は「愛の渡し込み」の結末部分を引用する形で、「笠置山相撲小説の魅力でもあった、危険なまでの「道」への傾倒は、ついに「愛の相撲」という前人未踏の世界を構築するに至るのである。」と解説しているが、「道のため」「相撲界のため」という崇高に見える概念的な動機づけよりも、「好きな人のため」という「俗情」と卑下されそうな動機の方が、人間は目標を明確にし、自覚を強く持つことを容易にする、ということがこのテキストの結末から伝わってくるのは確かである。そしてそのような結末に至る展開こそ、大衆文学の王道であった。

笠置勝一は『サンデー毎日』大衆文芸に応募することによって、戦略的選択として恋愛を描くことになった。しかし逆に見れば、恋愛を描くことを正当化するための戦略的選択として、『サンデー毎日』大衆文芸に応募したのではないだろうか。「好きな人のため」だったり、「家族のため」だったりというような動機は、人を強く動かすものになるが、一方でありふれていて「俗っぽい」ものでもある。この時代の「インテリ」が近代化を主張する際に提示する動機にはしづらかっただろう。『サンデー毎日』大衆文芸に応募することで、それは戦略的選択であるのだ、と「言い訳」をすることができるようになったのである。

3 笠置勝一になった意味

笠置山勝一として大いに名前が知られていたはずが、戦後の文学賞投稿時に笠置勝一に筆名を変えたのは何故か。笠置勝一の「作者の言葉」には、「愛の渡し込み」発表以前に「匿名で「ストーリー」に「花道」をかいた」と述べられている。この「ストーリー」という雑誌の該当号は現在

未発見のため、実際の「匿名」がどういう形だったのかは現時点ではわからないが、笠置山勝一が引退後に現役時代の呼び名使用を止めたことは間違いない。しかしそれならば、年寄として襲名した「秀ノ山勝一」を名乗ることはできなかったのか。

確認できる限り、新潮社の『旅』という雑誌の1948年5月号において、「秀ノ山勝一」名義の「力士生活」という文章が発表されている。その他、相撲協会の年寄としての仕事では、「秀ノ山勝一」名で1948年以降の記事が確認できる。つまり、「秀ノ山勝一」という筆名を「愛の渡し込み」応募以前（1948年12月末以前）に、既に使っていたので、「まだ使い始めていなかった」ということにはならない。

あるいは、笠置勝一は、このとき相撲界での仕事から軸足を作家の仕事に移そうとしたのではないだろうか。「笠置山勝一」と「秀ノ山勝一」は、それぞれはっきりと「相撲界」の名前である。これを使うことは、「相撲界」の人間として語り、書く必要があるし、それが求められる。しかし、「笠置勝一」は、「山」を取っただけだとしても、それは「相撲界」からの離脱を意味している。もちろん、それでも相撲をテーマにした小説を書き、相撲に関する文章を書いていくことにはなっている。しかしそれは「相撲界」の内部の人間としてではなく、外部の人間としての文章になる。

笠置山勝一の引退は前述の通り、1945年11月場所、戦後最初の場所であった。そこから相撲協会は拠点となる国技館を持たず、GHQとの交渉や対応を見ながら、大相撲の本場所会場確保と拠点としての国技館再建を目指し実行して奔走し続けていた。¹⁴ その努力は1954年の蔵前国技館の完成に結びつくのだが、「愛の渡し込み」発表までの状況で言えば、1948年は東京での本場所は屋根のない明治神宮外苑相撲場での開催で、大阪では仮設会場を建設、続いて1949年1月には東京でも仮設会場が設置されたが、長期の使用はできないことになっていた。大相撲の継続実施には不安要素も多かった時期なのである。¹⁵

「笠置勝一」名義での文章は、現時点でもう一つ確認できる。『ベースボール・マガジン 第一次 別冊』（1950年5月）に掲載されている「相撲小説 土俵に生きる」である。ここから、当時の彼が小説発表時の筆名として「笠置勝一」を用いようとしていたことがわかる。

この「相撲小説 土俵に生きる」の内容も、半ば内部告発的なものであった。

おそらくは戦前の時代、地方巡業に同行していた浦島検査役は、地元の顔役から、地元出身の加賀錦を巡業相撲で勝たせてほしいと暗に依頼される。しかし、スポーツの普及と発展が相撲の近代化が叫ばれ始めた時期にあって、浦島は花相撲と言われる八百長を排除したいと強く意識しており、その要求を受け入れがたかった。しかし、実際に巡業が開始されると、加賀錦は格上の関取相手に勝利する。しかし勝った加賀錦本人がそれに納得できていない表情を浮かべていた。それを見て、浦島検査役は物言いをつけ、この相撲が八百長であったと宣言した。驚く観衆の中、地元の顔役が何か合図をすると、数名の若者が土俵に押し寄せ、浦島検査役をビール瓶で殴打し、浦島検査役は土俵に倒れ込むのだった。

戦前の「相撲小説」や「愛の渡し込み」も相撲部屋の封建的な習慣を批判していて、中でもいじめ・暴力である「可愛がり」がしばしば描かれていたが、相撲協会の黙認下に行われる「八百

長」の告発と批判は「可愛がり」よりもはるかに影響の大きい指摘であることは間違いない。ここで指摘されるのは本場所での八百長ではなく、巡業中の「花相撲」と呼ばれる相撲でのことだが、笠置勝一の中では、たとえ花相撲であっても八百長の存在は認めがたかったのであろう。

このような指摘を小説とはいえスポーツ系商業誌で発表するとき、年寄という立場の「秀ノ山勝一」を名乗ることはできなかったのではないだろうか。そして、そのような所属の縛りを超えて語り、書くためには、「笠置勝一」を名乗らなければならなかったのではないだろうか。

そのときは、「相撲界」の将来自体への不安もあっただろう。作家を本業としていくことも考えていたのかもしれない。それは、笠置勝一「作家の言葉」の中の「力だめし」という表現にも表れている。「相撲界」の外部の人間として「相撲界」のことを書いて生きていくことは可能か。笠置勝一とは、それを「ためす」ために創られた作家人格だったのかもしれない。

4 まとめとして

結果的に言えば、笠置勝一という作家人格は1950年代には存在しなくなり、作家として生き残ったのは「秀ノ山勝一」となる。「相撲界」内部の人間として語る生き方が選択されたのである。

ここで「笠置勝一」という作家人格を「ためす」メディアとして『サンデー毎日』が機能したことの重要性を覚えておく必要がある。「『サンデー毎日』大衆文芸」での登場だったから、「笠置勝一」の登場はさほどの注目を集めなかったと言えるからだ。もしこれが明確に商業作家デビューを決める公募型文学賞であったら、笠置山勝一が秀ノ山勝一になった後に「笠置勝一」を名乗り「相撲界」外部の人間のように語り始めることが強く印象づけられていっただろう。そこでは当然立場の矛盾も露呈する。「『サンデー毎日』大衆文芸」であったから、「試行」の評価でとどまったのである。小説としても、「相撲界」内部のリアリティが担保されるとしても、そのリアリティを理解できるのは相撲ファンに限られる。発表する小説が「相撲小説」だけである限りにおいて、小説家としての「笠置勝一」が商業作家として生き続けるのは厳しかった。

「笠置勝一」は戦後直後における「笠置山勝一」→「秀ノ山勝一」の間の不安と動揺から生じた作家人格であったと言える。「『サンデー毎日』大衆文芸」は「習作発表の場」であり、常連投稿者が入選・佳作を繰り返すことがままあるやや閉じた環境になっていく傾向があったが、そのような場であったから、「笠置勝一」は作家としての価値を試すことが可能にもなった。『サンデー毎日』と『『サンデー毎日』大衆文芸』には、単なる作家修業のメディア、作家デビューの足場という単純な機能だけでなく、もっと幅広い存在意義があったことを、「笠置勝一」の入選は示しているのだ。

※本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究C「〈大衆文学〉の新人文学賞に関する総合研究—『サンデー毎日』大衆文芸」を軸として」（研究代表者：和泉司、研究課題番号：18K00276）および基盤研究C「戦前期『サンデー毎日』と大衆文化に関する総合的研究」（研究代表者：副田賢二、研究課題番号：17K02487）の成果である。

後注

- 1 P.L.B. (川口則弘) 『『サンデー毎日』大衆文芸 入選作一覧』(「文学賞の世界」 <https://prizesworld.com/prizes/novel/smtb.htm>) を参照。
- 2 『『サンデー毎日』大衆文芸』については、和泉司「戦前期『サンデー毎日』の賞イベント『『サンデー毎日』大衆文芸』と第一回千葉亀雄賞を中心に」『雲雀野』第45号(2023年3月)においてまとめているので、ここでは詳細は述べない。
- 3 注2の和泉前掲論文にこの点も既述している。
- 4 注1のP.L.B. (川口則弘) のサイト『『サンデー毎日』大衆文芸 入選作一覧』に詳しくまとめられている。
- 5 早稲田大学高等学院は戦前期の旧制学校制度における早稲田大学の予科に相当する学校。第一と第二の高等学院があり、第一は中学4年卒業者向けの3年制、第二は中学5年卒業者向けの2年制であった。山本剛「旧学制下における早稲田高等学院の設立課程に関する一考察—創設時の教育理念、教育内容に着目して—」『早稲田大学史記要』第48号(2017年2月)を参照。
- 6 赤澤前掲「戦時下の相撲界—笠置山とその時代—」を参照。「専門部」とは旧制中学校卒業段階で入学できるコースで、法制度上は大学ではなく旧制の専門学校に当てはまる。赤澤によれば、当時の出羽の海、春日野などの親方達は「大卒力士」を登場させるために笠置山の育成に熱心であったらしく、それと同時に少しでも早く笠置山を卒業させるために大学学部ではなく専門部へ転学させたのだと思われる。
- 7 赤澤前掲「戦時下の相撲界—笠置山とその時代—」を参照。
- 8 胎中前掲『叱られ、愛され、大相撲! 「国技」と「興行」の100年史』を参照。
- 9 胎中前掲『叱られ、愛され、大相撲! 「国技」と「興行」の100年史』を参照。
- 10 胎中前掲『叱られ、愛され、大相撲! 「国技」と「興行」の100年史』を参照。
- 11 谷口前掲「笠置山勝一と『新青年』～あなたはもう笠置山勝一の叫びを聞いたか～」を参照。
- 12 谷口前掲「笠置山勝一と『新青年』～あなたはもう笠置山勝一の叫びを聞いたか～」を参照。同時に谷口は、「力士以外の登場人物の造形等は、正直なところプロ作家の技術に比して凡庸と言わざるを得ない。」としつつ「彼は作家としてではなく力士として小説づくりに腕をふるったのである。」と分析している。
- 13 P.L.B. (川口則弘) 『『サンデー毎日』大衆文芸 入選作一覧』(「文学賞の世界」 <https://prizesworld.com/prizes/novel/smtb.htm>) を参照。
- 14 胎中前掲『叱られ、愛され、大相撲! 「国技」と「興行」の100年史』を参照。
- 15 胎中前掲『叱られ、愛され、大相撲! 「国技」と「興行」の100年史』を参照。